

氏 名	中 川 ゆかり
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 5041 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	上代散文の表現の研究
論文審査委員	主 査 教 授 毛 利 正 守 副 査 教 授 村 田 正 博 副 査 教 授 栄 原 永 遠 男

論 文 内 容 の 要 旨

第一章「神話を語る言葉」は神話であることの特徴を言葉を通じて考えたものである。神話の概念規定は様々な形でなされているが、それを語り方から捉えようとしたのが第一節「神婚譚発生の基盤」である。上代文献を対象に、神婚譚の分析を通じて、表現の面から神話を規定しようとした。第二節「神霊の憑り来るサキ」はカミと交流することと「場所」との係わりの考察から、神話にとって重要な要素がいかに語られているかを見ようとした。第三節「出会いの表現」は人知を越えた不思議な出会いを語るのに格好の表現について、第四節「神話を記述する言葉」は神話を文字で書く際の工夫について考えたものである。

第二章「古事記の表現」は、古事記のものがたりの語り方の工夫についての論である。古事記の述作は資料の継ぎはぎであって、編者が自由に書き下ろしたものではない。その継ぎはぎの巧妙さを第一節「イザナキ・イザナミの国作り」で取り上げた。第二節「鉤穴を通る神」は漢訳仏典のプロットを用いての神話のリニューアルの方法、第三節「応神記の『厳飾』」は漢訳仏典語を使うことによる、物語の場面・人物像の具体的な描出について、第四節「あぐらゐの神」は「あぐら」・「呉床」とは何かを考証することによって、雄略天皇像造型の一面を考えた。第五節「文体の工夫」はそれ以前の四節と異なり、文体の面から、古事記のものがたることに対する工夫を見出そうとしたものである。

内容に重なる点を持ちながら、古事記とは異なった文体を選択する日本書紀にどのような表現上の特徴が見られるのかを考えようとしたのが、第三章「日本書紀の表現と受容」である。第一節「日本書紀の漢字・漢語選択の意識」では「ウケヒ」という言語呪術を表わす言葉の翻訳の際の配慮をめぐって考察した。第二節「『努力』をユメと訓むことについて」は「努力」という言葉を取り上げ、口頭語としてそれにふさわしい漢語で記述されていること、そして、ユメという訓はその語性を正しく理解して付されていることを述べた。第三節「講書と竟宴」では、日本書紀の講書の竟宴で詠まれた和歌を取り上げ、日本書紀を講ずることと、和語で訓むという行為との係わりの深さを見た。

第四章「風土記の表現」は、風土記がそれぞれの国をどのように描き出しているかを言葉遣いの面から考察することによって、各風土記の個性を見出せないかという試みである。第一節「播磨国風土記の一特徴」は、求婚の表現から播磨国風土記の伝承と文章の特徴を探ろうとした。第二節「豊後国風土記の語る世界」・第三節「『勅+動詞』の語法」・第四節「肥前国風土記の文章」は豊後国・肥前国がどのように描かれているか、また、書き手がどのような意識をもっていたかをその文章上の特徴から見ようとしたものである。

以上、第一章から第四章までの論考は言葉か物か、いずれかを取り上げ、その考証を通じて結論を導き出そうとしたものである。その言葉や物が問題解明の鍵となると考えての立論である。

いわゆる訓詁注釈の方法であるが、その文辞をどう訓むかということだけを目的にするのでないことは言うまでもない。それを通じて、その物語、その書物が何を語ろうとしているのかを知ろうとするものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、古事記・日本書紀・風土記等、上代散文にみられる神話を表現の面から詳細且つ包括的に論述して、その特質を探る力作である。

人がカミと結婚する、また神の御子を生むというモチーフは古代伝承中にしばしばみられるが、第一章第一節では、カミガカリを表す「帰神」という語から、カミとの結婚がカミと一体化する祭祀を基盤としていることを導き出し、祭祀における籠の場に通じる川のホトリや海辺でカミと結婚するという幻想が付加されて、“神婚譚”なるものが生まれることを明らかにする。従来、無限定に使用されがちであった「神婚」という言葉の概念を規定したところに、本節の価値が認められる。

第二節は、人々は霊的な存在と交渉しようとするとき、ある特別な場所を選ぶが、前節に続いて、他界と、人間が住む世界の境界の先端である、丘のサキ、川のサキ・海のサキを取り上げ、サキが呪力ある地と見做される宗教的な古さをもつことを見届けて、神霊を迎える場としての重要性を指摘する。なお、サキを神霊の憑りつく場所とする考え方が、日本古代の他界観全体の中でどのような位置を占めるかについての言及も、今後に更に期待されるところである。

現代語にはないが中世以前の作品には“相手が（自分に）会った”という表現が見られる。第三節は、従来、“相手がアフ”型構文は偶然の出会いを表すと捉えられてきたが、出会いの思いがけなさによる表現主体の驚きが、相手の方が自分に会ったという認識を生み、“相手がアフ”型構文を取らせたと把握する。具体的に分析しており、極めて説得性を有する論者創見の論である。

神話を記述する際、その神話の持つ力の損失をできるだけ少なくするための配慮の一つに適切な漢語の利用があることを説いたのが第四節である。この節では、ホヲリの命がワタツミの神の宮に到る特別な道であることを示すための「御路」と、神の仮の姿であるウルハシキヲトコのヲトコに「壮夫」が選ばれたことが論じられる。神話の記述の配慮として、適切な漢語が積極的に利用されたことを把握する点に独自の視点がある。

第二章第一節は、イザナキ・イザナミは高平原の天神から、「このただよへる国を修理固成せよ」という命を受け、二神が実行したのは、結婚して嶋々や神々を生むことであったが、この古事記の冒頭部分の「修理固成」をどう解釈するかについては、従来、種々論じられてきた。しかし、従来説の語義は、二神が命令に従って実行したのがなぜ嶋々や神々を生むことであったかについての理解が届かないとして、あらたに、「修理」の用例を詳細に吟味・検討して、“作り直し”の意を見出し、新しい解釈を導き出した点が大きな成果として評価できる。

第二節と第三節は、古事記と漢訳仏典との関わりを論じた節である。イクタマヨリヒメの許を壮夫が毎夜訪れ、ヒメは懐妊し、壮夫の正体を知ろうと衣服に糸をつけると、その糸は鉤穴から出て三輪山まで続いたという著名な三輪山神話について鋭い分析がなされている。とりわけ、古事記の三輪山神話に見られる珍しい鉤穴は、漢訳仏典で阿難が神通力を示すためにカギ穴を通過する話を下じきとしていることを論証し、三輪山の古い蛇神の信仰に新しい装いを加えるといった神話におけるモチーフの改変を見定めることに成功した論である。ただ、次の応神天皇の御子ウヂノワキイラツコに係わって用いられる、漢訳仏典語である「嚴飾」の語の使われ方から、ウヂノワキイラツコの人物像を導き出す論にはやや説得力を欠く面がある。

第四節は、古事記の天皇の中で、「あぐらゐの神の御手もち云々」と詠まれる歌を手掛かりにして自ら神と称する雄略天皇について考察し、雄略天皇を神に匹敵するような理想の天皇として描いていることを論述する。また「あぐら」が「椅子（いし）」ではない座具であることを明らかにして、立座具に坐る人の特権的な立場をも確認し得た重要な論である。

第五節は、文体の面から、古事記を追究する論考である。日本語と漢文の大きな違いの一つが語順であるが、とりわけヲ格を含む構文について、動詞の前後にヲ格とニ格を分置するヲ格分置型と、助詞ヲを「矣」で書き表すあり方とを分析して、とくに後者が和文の萌芽といえるものだと把握する。古事記の、日本語や日本の伝承を記すことに対する意識をヲ格の書き表し方から考察して、古事記の主體的な在りようを見出したところが

高く評価できる。

第三章第一節は、日本書紀は漢文体であるゆえに、神話や古伝承が記される作業は一種の“翻訳”であるが、その翻訳がどのようになされたかを“ウケヒ”という言葉を中心に考察を加えた論である。ウケヒが「誓」・「祈」・「呪」という漢字を用いて表されることから、この言葉の翻訳がたやすくなかったこと、また、日本書紀独自の論理でウケヒが書き分けられていることを解明する。なお、ウケヒの場合にひき続いて、他のいくつかの語をとり挙げ、日本書紀の翻訳の態度をさらに追求していくことが今後に望まれよう。

第二節は、「努力」には、「つとめ励む」や「一生懸命する」の意とは別に、口頭語として「しっかりしろ」・「気をつけて」といった現代語にはない語義が、中国語において南北朝時代頃よりあったことを踏まえ、それを受容した日本書紀の会話文中の「努力」の語義を見定めると共に、ユメと付訓することの正当性を的確に説いた確かな論である。

第三節は、日本紀竟宴和歌の題詞選択の背景を探る論考である。この竟宴和歌の歌題が何を基準に選ばれたか、従来、あまり問われることがない中で、それを問うて、日本紀竟宴和歌が日本書紀講書の成果を示すものとしての一面を持つこと、同時に、日本書紀を日本語でよむことにいかにエネルギーを費やしたかを具体的に論じている。

第四章第一節は、播磨国風土記では求婚が「詔」の文字で表されているが、「詔」で表される求婚が「聘」や「娉」、「求婚」と異なるニュアンスを持つことを克明に且つ正確によりみ解き、それが播磨国風土記に多用される理由と意義とを考究したところに、本節の新しさがある。ただし、播磨国風土記の文章には新古や、和文的あるいは漢文的など、重層的な面が存するので、引き続きさらに広く言葉や語句をとり挙げて、播磨国風土記の文章全体の特徴を押さえることが、今後に期待される。

第二節で扱う豊後国風土記および第四節で扱う肥前国風土記を含む西海道風土記には、「消息」や「凱旋」、また「片時」・「見在」・「就中」など他の風土記には用いられない言葉や語法がある。西海道風土記の言葉遣いの共通性は、従来よく論じられてきたが、この二つの節では、上にみる語句・語法を通じて、豊後国と肥前国がどのように描き分けられているかを説き明かし、従来の研究を一層押し進めた論として、評価される。

「勅+動詞」は、日本では主に西海道風土記と続日本紀に見える語法であるが、第三節では、この語法に着目して大宰府の官人によって使いはじめられたことを指摘する。その論証には、続日本紀における精緻な本文批判をはじめ、従来、「勅」に通じるとされてきた「勅」が、きびしい強制力を表す語であることをつきとめ、加えてこの語法の記された時代及び使い始めた人をも特定するといった指摘は重要な意味をもつものであり、注目される。

作品全体での位置づけに対する考察の中で、今後、更なる追究が期待される所も残しているとは言え、一つ一つの語句・言葉の分析・考証は精緻であって中川氏の創見がきわめて多く、すぐれて独創的で重要な意義を有する研究成果であり、また、以上の論考は、多く既に学界でも高い評価を得ているものである。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。